

# 過疎地域における祭りの終了と再生のメカニズム

—— 三重県神川町の「桜祭り」から  
「桜覧会」への転換に注目して ——

井 口 暁

## 1 祭りの形態変化と地域の葛藤

本稿の目的は、三重県熊野市神川町における花見を目的とした祭りの変化を事例に、過疎地域における祭りの存続形態について検討することにある。具体的には、この地域で続けられていた「桜祭り」が担い手の減少とともに住民の不満に直面する中で廃止に至り、その後新たな祭りとして復活した過程に注目することで、過疎地域において祭りをめぐりどのような意見の相違や対立が存在するのか、またそうした条件の下で祭りの継続を模索する場合にどのような工夫が必要となるのかについて検討する。それを通じて、祭りの存続形態や変容プロセスが、担い手の減少など量的な変化に関連するだけでなく、祭りをめぐる地域社会内での意見の多様化や葛藤、折衝と連動していることを明らかにする。

日本の中山間地域では古くから地域の祭りが執り行われてきた。しかし、1950年代以降の高度経済成長に伴う都市部への人口流出による「過疎」問題、さらに近年では少子高齢化による自然人口縮小問題としての「限界集落」問題に直面する中で、伝統的に祭りを支えてきた若者の減少や地縁集団の縮小・空洞化などにより、祭りの存続が困難となるケースが増加している。こうした中で、祭りの存続はいかにして可能なのかという問いが重要性を帯びている。例えば祭りの催しを簡素化したり、日程を縮小するなどによる対応がこれまでも報告されてきた。だが、近年の研究では大きく分けて次の2つが焦点となっている。1つは、祭りを何のために、誰のために行うのかという祭りの趣旨ないしコンセプトに関連し、従来の自足的な「する」ベクトルと、外部からの見物客に「見せる」ベクトルをいかに調整するかが問題となる。もう1つは、誰が祭りを担うのかという運営主体、運営形態に関連し、従来のような地域内だけでの地縁的な運営が困難となる中で、外部との連携をどのように調整するかが問題となる。

1つ目の点は、伝統的に地域内で執り行われてきた祭りを、外部から観光客や見物客を

呼び込むための観光資源として再編し、新たな意味をもたせることで、生き残りを図る試みである。元来祭りとは、五穀豊穡や無病息災の祈願などを目的として、地域の氏子や信者により、神を地域に迎え入れ、神をもてなし、神と交流するために執り行われるものであった。つまり、宗教的・神事および地域住民による地域のための自発的な行事としての性格を備えていた。しかし、都市部を中心に新たな形態の祭りが登場する。神のためではなく、外部から見物人や客を集め、「見世物」を提供することで彼らに楽しんでもらい、金銭を落としてもらうことを目的とした世俗的な祭り（イベント）である。柳田國男は、前者を「祭り」、後者を「祭礼」と呼び、日本の祭りの風景が前者から後者へと変貌を遂げる様を指摘していた（柳田 1969）。この変化は、「する祭り」から「見せる祭り」への変容、あるいは祭りの「商品化」「見世物化」「イベント化」などと呼ばれている（小松 1997）。

過疎問題に直面する中山間地域では、1980年代の地域おこしブームの影響もあり、祭りを地域活性化や観光の中心的資源として再編する動きに拍車がかかっている。もちろん、成功を取めた事例も多く存在する。しかし、祭りの「商品化」に伴う問題点も指摘されている。祭りの集客機能が期待される中で、祭りの位置づけや目的が変化してしまったり、観光客のニーズや都合に合わせて催しの内容や日程の変更を余儀なくされたり、イベントの「マンネリ化」などによる新たな困難が指摘されているのだ（小松 1997: 35; 芦田 2001; 卯田・阿部 2015: 34）。もちろん、それらにうまく対応した事例も報告されている。例えば、長野県佐久市望月地域の榊祭では、伝統的に集落地区内で執り行われてきた祭りの存続が困難となる中で、伝統的・神事と並行して世俗的なイベントとしての「町民祭」の共催が新たに模索され、しかも町民祭が昼の部、榊祭が夜の部として時間帯が明確に区別されたことにより、祭りの大幅な意味変容が回避されたという（卯田・阿部 2015）。ただし、こうした試みが常にうまくいくとは限らない。埼玉県秩父市荒川白久地区における天狗祭りでは、地域で伝統的に行われてきた祭りが担い手不足により終了に至ったものの、新たに再生された。しかし、その過程で、祭りの催しの内容や場所が変更され、住民が重視していた祭りの意味が失われることで、再び休止に至ったという（貝沼 2017）。

以上の問題は、一般に、神事としての伝統的な祭りに関して指摘されることが多い。しかし、本稿が注目する桜祭りのような世俗的な祭礼においても生じると考えられる。小松和彦によれば、宗教的信仰の衰退等により神事としての「祭り」は減少し、世俗的な祭り（イベント）が増加しているが、後者においても、外部から客を集め地域経済の活性化を図るという方向性と、地域住民が自分達の交流や地域への愛着・アイデンティティを育むために行う「コミュニティ・イベント」という方向性との2種類が存在する（小松 1997: 31-8）。したがって、宗教的な「祭り」から世俗的な「イベント」「祭礼」への変容過程だけ

でなく、後者の内部においても、「する」方向と「見せる」方向の調整が課題化している  
と考えるべきである。

もう1つの問題は、祭りの担い手をどのようにして確保するのかという問題である。近年、  
様々な試みが報告されている。例えば、集落区単位で執り行われてきた祭りをより広域の  
町単位へと広げ、より大きな組織である町内会へと包摂しようとする試みがある（卯田・  
阿部 2015）。また、大学生や外部サポーターを地域外から呼び込み、運営に携わってもら  
うことで人手不足を解消したケースも報告されている（田・谷川 2006; 藤本他 2010）。た  
だし、そうした連携が短期的、単発的なものに終わってしまったり、地域の伝統行事や神  
事に「よそ者」を入れることへの警戒感や反発などによりうまくいかない場合もあるだろ  
う。「誰が」祭りを担うのか、という問題は依然課題として存在する。

以上のように、過疎地域における祭りの存続形態に関する研究では、地域を取り巻く様々  
な変容に伴い、従来自明であった祭りの意味や形態に関する再考と再編がますます迫られ、  
「誰が何のために、誰に向けて祭りをを行うのか」という点に対して新たな意味づけが求め  
られるようになってきている状況が取り上げられ、様々な先進事例が報告されている。

しかしながら、以上の研究においては、祭りの存続形態や変容プロセスが、祭りをめぐる  
地域社会内での意見の対立や交渉の過程から切り離される傾向がある。両者がどのよう  
に連動しているのかについて踏み込んだ検討はほとんどなされていない。多くの研究では  
しばしば、祭りや地域社会の調和的關係が想定され、地域社会は祭りの継続に前向きな、  
一枚岩的な存在として扱われる傾向がある。その前提の下で、例えば祭りの継続を困難に  
する人的・資金的問題（いわば「量的」な問題）が注目され、その外部からの補填などが  
論じられる。しかし、特に過疎地域では、人口減少や少子高齢化などを背景に、祭りに対  
するモチベーションや意欲そのものが多様化しており、祭りをめぐる従来の合意がもはや  
自明ではなくなっている場合が少なくない（小田切 2009）。もはや祭りの継続に対して地  
域社会は一枚岩ではない。祭りが地域を舞台に行われる以上、多かれ少なかれ地域社会か  
らの理解や支援は必要であり、地域内での意見調整や了解形成が不可欠となろう。例えば、  
仮に外部の連携先が見つかったとしても、「よそ者」をめぐる地域内の警戒感や反発が根  
強ければ連携はうまくいかないだろう。祭りに対する地域内の合意が非自明化し意見が多  
様化する中で、祭りの継続や再生を試みる場合、人手不足や資金難などの技術的な問題を  
クリアするだけでなく、地域内の葛藤とどのように向き合うのか、どうしたら地元の理解  
を得られる形へと祭りの姿を変えていけるのかが課題となることも少なくない。だが、従  
来の研究では、祭りや地域社会、および各々の内部における緊張関係や対立関係はほとん  
ど検討されてこなかった。しかし、過疎地域における様々な試みや努力、工夫の意味を捉

えるためには、それらが地域社会内の交渉や葛藤といかに関連しているのかというローカルな文脈に踏み込んだ検討が必要になるのではないだろうか。

以上のような緊張関係に関しては、近年、都市祭礼研究において次第に蓄積されつつある（芦田 2001; 有本 2012; 谷部 2008, 2012）。従来の祭礼研究では、祭りの社会統合機能に関するデュルケーム・テーゼの影響の下で、祭りが地域社会の統合の再生産に寄与するという「予定調和的」な議論が根強かった。それに対する反省の下で、近年の研究は、祭りを形作る競合・対抗・対立といったコンフリクトの局面に注目している。ただしそこで主な焦点となっているのは、祭りを執り行う担い手集団の内部（外部の担い手を含めた）における競合や対立であり、本稿が注目するような祭りや地域社会の緊張関係ではない。確かに谷部真吾は、こうした点に踏み込んだ検討を行っている（谷部 2008, 2012）。しかしそこでの事例は 1930 年代および 1960 年代の祭りであり、近年の過疎地域の祭りを対象とした検討は一般にほとんど存在しない。したがって、過疎高齢化の進む地域社会において祭りをめぐってどのような意見の相違や折衝が存在し、祭りがいかに形を変えながらそれらへの適応を図っているのかという点に関しても検討を進める必要がある。別の角度から見れば、地域社会からの合意や後押しがますます自明ではなくなり、もはやそれらを頼りにできなくなる状況において、祭りの存続はいかにして可能なのか、可能だとしたらその条件は何か、どのような資源やネットワーク、枠組みが新たな拠り所となりうるのか、という問いに取り組む必要がある。

こうした探求にとって、神川町の事例は重要な手がかりを提供してくれる。神川町では 1980 年代から、一部の住民により春になると夜桜鑑賞を目的とした私的な「飲み会」が開かれていた。1980 年代後半にその催しが地域活性化の資源として注目され、「桜祭り」という地域単位の世俗的な祭りとして開かれることとなる。以後、地域外の人々に地域に足を運んでもらい、交流するための中心的な場として親しまれてきた。しかし、2010 年代に入ると、祭りの担い手の減少や高齢化、催しの「マンネリ化」などにより、祭りの継続の是非が議論されるようになる。そして、町民の意向を確認するために実施された 2015 年の住民アンケートでは、桜祭りに対する不満と祭りの「終了」に賛成する声が多数を占めたため、30 周年となる 2017 年をもって桜祭りは廃止されることとなる。以上の経緯を詳しく検討してみると、桜祭りの終了の過程には、まさに地域内での意見の相違や不満の表面化が関係することが見えてくるのである。

他方、桜祭りの終了から 1 年後の 2018 年春、地域から祭りがなくなることに寂しさを感じた一部の住民と、桜祭りの時から協力関係にあった近畿大学の教員・学生が連携することで、有志団体「神川企画」が立ち上げられ、「桜覧会」（さくらんかい）という新たな

祭りへと「リニューアル」されることとなる。この復活した祭りにはいくつかの注目すべき変更点が存在する。まず、運営形態が地域主導から有志主催へと転換するとともに、地域外の大学教員・大学生という外部の人々との連携が強化されている。そして、「住民がゆっくりに花見を楽しむための祭り」への転換が強調されている。こうした動きは、人手不足などの事情に対応するものであるだけでなく、桜祭りの終了のきっかけとなった不満や批判にどのように向き合うのかをめぐる試行錯誤としても位置づけられるのである。

全国的な流れと比べると、以上の試みには、外部の協力者との連携強化など共通する部分が多い。しかしそれとは異なる、「逆行」する動きも含まれている。第一に、運営形態の面では、担い手不足が深刻化した場合、一般に、祭りの運営団体を地域全体でサポートするために「公営化」したり「広域化」したりするなどの対策が取られることが多い。対して桜覧会では、担い手の確保がより困難化すると思われる「有志化」が選択された。第二に、祭りのコンセプト面では、一般に、地域を外部にアピールし、経済的活性化や新住民獲得を促進するために、祭りの観光化が進められることが多い。対して桜覧会では、反対に、「見せる祭り」からの脱却と「住民自身が楽しめるコミュニティ・イベント」への回帰が進められたからである。こうした独自の取り組みの意味と背景を理解するためには神川固有の文脈に光を当てなければならない。それを検討してみると、桜覧会の様々な取り組みは、少子高齢化などの人口統計学的な変化に対応したものであるだけでなく、祭りに対する地域内の批判に対応するため、あるいはこうやってよければある面では批判を「かわす」ために要請されたものでもあるといえるのである。換言すれば、祭りの形態変化が地域内での了解調整のプロセスと連動していることが明らかになるのである。

桜覧会の開催は2年目であり、今後も地域に長期的に定着していけるか注視する必要がある。だが、神川町における祭りの継続をめぐる試行錯誤や工夫には、同様に祭りに対する意欲や意向が多様化している全国の中山間地域にとっても有益なヒントが含まれているのではないだろうか。

そこで本稿では、以下の流れで考察を行う。2では、神川町において祭りがどのように変化してきたのかを、3つの時期に分けながら整理する。3では、そうした祭りの変化が、祭りに対する地域内の葛藤とどのように関係しているのかを明らかにする。3-1では、住民アンケートを基に、桜祭りに対する不満や批判の内容を整理する。3-2では、桜覧会における取り組みがそうした不満をいかに踏まえたものであるのかを検討する。4で本稿の考察の結果と意義をまとめる。

調査方法は、祭りの運営組織の関係者、神川町内外からの祭りの参加者などへの調査、2015年の桜祭りにおける参与観察によった。調査は、2014年6月27日～28日、9月12

日～16日、11月29日～30日、2015年4月4日～5日、9月12日～15日、11月28日～29日、2019年6月29日～30日にかけて実施したものである。

## 2 地域の変化と祭りの変化

### 2-1 神川町の概要

本稿が対象とする神川町は、三重県南部にある熊野市の中でも、奈良県との県境に近い山間部に位置する。熊野灘に面する沿岸部の熊野市街地からは車で30分ほどかかる。奈良県南部から熊野川合流を経て熊野灘に注ぐ北山川の畔に位置し、高度経済成長期の電源開発で作られた「七色ダム」に隣接している。神川町は、基石の原材料となる「那智黒石」が世界で唯一採れる産地として知られる。また明治期を代表する写真技師で、新選組土方歳三の有名な写真を撮ったとされる田本研造が生まれ育った生家跡が残る地域としても知られる。

2015年の国勢調査によると、神川町の総人口は277名150世帯である。高齢化率は約58%で、いわゆる「限界集落」に近い状況がある。神川町には、神上（こうのうえ）、長原（ながはら）、花知（はなじり）、柳谷（やなぎたに）という4つの地区が存在する。神上と長原が隣接する盆地に人口の約8割が住んでおり、熊野市役所の出張所、郵便局、公民館、商店、熊野市立神上小中学校、桜祭りの会場である神上中学校旧校舎などの主要施設が存在する。この盆地から花尻、柳谷には車での移動が必要である。

神川町では、近隣の山間部の地域と同様、古くから農業と林業を生業とする生活が営まれてきた<sup>(1)</sup>。木挽職人が大鋸を使って木を切り出し、キンマとよばれる木材を使ったレールのような木材搬出路を通じて川岸まで運ぶ。そこから木材を筏にのせ、北山川を通じて沿岸部まで運んだ。この一帯にはこうした木材輸送のネットワークが存在し、神川町はその要所として栄えた。しかし、戦後は外国産の安価な木材の輸入拡大により、林業は厳しさを増していく。

こうした中、戦後復興のエネルギー開発政策の下で、多目的ダムの建設候補地として神川町が隣接する北山川の畔が選定される。神川町はまさに「ダム景気」に湧いた。ダム用地として買い上げられる家屋や田畑への補償、また生活の変化に対する謝礼などにより、中には莫大な補償金を手にした住民もいたという（石川他 2004: 148-9）。ダムの建設開始に伴いこの小さな集落に大量の建設作業員が押し寄せ、町には建設会社の本部や作業員の

<sup>(1)</sup> 神川町の歴史と近年の変化に関しては、石川他（2004）、井口（2015a, 2015b）も参照。

宿舎、彼らの生活を支える商店、民宿、食堂、キャバレー、パチンコ店などが作られた。しかし、1965年にダムが完成すると、ほとんどの関係者や作業員は撤収していった。集落からは人影が消え、あとには土地と職を失った住民と、かつては四万十川にも劣らないと言われた北山川の変わり果てた姿が残った（2014年9月13日調査より）。

高度経済成長に湧く当時、全国では「庭石ブーム」が起こり、神川町の人々もダム景気後の苦境を抜け出そうと高級庭石として那智黒石を売り出し、「那智黒ブーム」を作り出そうとした（石川他 2004: 148）。それが成功を収め、一躍那智黒石産業は活況を博した。ただし、集落では着々と過疎高齢化が進み、バブル経済が崩壊した後は那智黒石産業も厳しい状況にある。ピーク時は20軒以上の業者がいたが、2014年には約6軒まで減ってしまった（2014年9月13日調査より）。

こうしたダム景気後の活気を失った地域をどうにか盛り上げようと、本稿の対象である桜祭りが企画・開催されることになる。

## 2-2 祭りの変遷

### 2-2-1 桜祭り前史——私的な飲み会

ところで、桜祭りは当初から地域単位の祭りとして行われていたわけではない。起源は定かではないが、遅くとも1980年代半ばまでには、桜祭りの前身となる「飲み会」が行われていたようである。

神川町では春になると、地域で活動していたアマチュア無線クラブの若手メンバーが中心となり、夜桜見物と親睦を目的とした私的な飲み会が行われていた。場所はかつての電源会社のグラウンドだった。そこを含め、神川町には、元々神川町にあるものや、電源会社によりダム荒廃地に植樹されたもの、市役所の農林水商工課から提供してもらったものなど、約1500本の桜の木があり、春には見事な桜並木となる（森田 2004: 131; 石川 2004: 150）。

ある時、若手メンバーをまとめていた方が中心となり、「こんなにきれいな桜、自分達だけで見るのはもったいない。よその人達にも見てもらおう」という話になった（森田 2004: 131）。その飲み会に最年少として参加していた方によれば、一応地域の中でやるので当時の神上区長に相談に行ったところ「一発OKだった。どうせやるなら地域で盛大にやろうということになった」（2014年9月13日調査より）。こうして元々一部の若者が純粹に楽しみや親睦を深める目的で行っていた私的な催しが、ダム景気後の地域活性化策を模索していた地元で注目され、桜祭りという地域の祭りとして開催されるようになる。

こうした動きに異論や反発はなかったのだろうか。聞き取りの限りでは、ほとんどなかつ

たようである。いくつかの理由が考えられる。第一に、当時の神川町には、祭りの担い手となる若者が多く居住し、まとまりも強かったことから、他住民への負担が比較的小さかったためと考えられる。第二に、当時の神上区長は市議会議員を歴任し地域活性化にも積極的な方であったため、新たな祭りを地域一丸となって支えようという動きにおいてリーダーシップを発揮した可能性がある。第三に、ダム景気後の衰退に対して住民の間でも危機感や焦燥感が共有されていたため、新たな試みに対して反発よりも期待の方が上回ったと考えられる。

### 2-2-2 桜祭りの開催

1988年4月に「那智黒石の里 神川ふれあい桜まつり<sup>(2)</sup>」(以下「桜祭り」とする)が開催される。当初は本当に人が来るのか不安であった。だが、いざ開催してみると約3000人も来客がこの小さな村に殺到し、みんな驚いた(森田 2004: 131)。以後、桜祭りは神川町最大規模の催しとして毎年開催される。

桜祭りの会場は、電源会社のグラウンドが利用されていたが、2010年前後からは神上中学校の旧校舎とグラウンドが活用されている。全国的にも珍しい木造校舎を数百本の桜が囲む光景は絶景であり、春になると多くの写真家や廃校愛好者が訪れる。

さて、当初の飲み会から比べると、桜祭りには運営形態やコンセプトの面で重要な変化がみられる。

第一に、飲み会時は地域の若者が純粹に花見を楽しみ、親睦を深めることが目的であった。対して、桜祭りでは、地域外の人々に神川町に足を運んでもらい、美しい桜や那智黒石、地域のシンボルである中学校旧校舎など地域の良さに触れてもらうことが目的となった。熊野市観光協会のHPにかつて掲載されていた説明文にはこうある。「過疎化に歯止めをかけ、日本で唯一『那智黒石』を産出する“那智黒石の里”としてPRを行うため、昭和63年から始まった地元手作りのイベントです。七色ダムから会場周辺にかけて、ソメイヨシノを主として約1500本もの桜が見頃となる時期に合わせて開催されます」。以上からも地域の特産品である那智黒石をPRしようとの意図が読み取れる。換言すれば、有志の住民が自分達のために自発的に行う「する祭り」から、地域住民が一体となって裏方に徹し、地域外からの来客をもてなす「見せる祭り」へと構図が変化したことが見てとれる。いまや住民は「観客に財布の紐をゆるめさせる見せ物小屋の主人」(小松 1997: 34)に徹しなければならなくなったといえる。

---

(2) 桜祭りの歴史と変遷に関しては、森田(2004)、永野(2015)、井口(2016)も参照。



第二に、運営形態も有志から地域単位へと転換した。桜祭りの運営団体は、桜祭り実行委員会（以下、実行委員会）であり、幹部メンバー（若手メンバー）から成る事務局が中心となっている。実行委員会は任意団体である。しかし、祭りの会場がある神上地区では全ての若者の男性がメンバーに入っているとのことであった（2014年9月13日調査より）。また、神川町外のメンバーはいなかった。ここから、日本の町内会と同様、制度的には任意であるものの実質的には地縁に基づく半強制的なメンバーシップが存在すると考えられる。この実行委員会は、他地域における青年団などに近い組織であると考えられる。

当初地域には多くの若者が存在し、桜祭りを支えていた。しかし、2014年当時、実行委員会のメンバーの減少と高齢化が進行していた。当時実行委員会のメンバーは全体で約30名であったが、30代、40代のメンバーはわずか7名ほどであった。「若手」が不足しており、年配の委員からはこのままの形で祭りを続けていくのは体力的に限界だという声が上がっていた。かつては企画づくりや準備のために何度も会合を重ねていたが、2014年当時は全体会議が2回にまで減ってしまった。かつては2～3週間前から準備を行っていたが、近年は前日に準備をするだけになった（永野 2015: 57, および, 2014年9月13日調査より）。

ところで、前述のような地域一丸となって祭りを支え来客をもてなすという構図は、実行委員会のメンバーにだけでなく神川町民全体にも求められていた。その典型が、祭り当日に神川町が販売する草餅作りである。地域の田畑で取れる天然の無農薬のヨモギで作った草餅は、桜祭りの一大人気商品であり、多くの人が遠くから買いに訪れ、約6000個がすぐに売り切れとなる。草餅販売で得られた収入は桜祭りの重要な運営資金となる。市からの助成金や地域からの寄付金だけでは運営が困難だからである（2014年9月13日調査より）。地域の野山でもぎを摘み取り、祭り当日に餅をつき、草餅を丸める作業は住民総出で行われる。餅つき機の登場により一定の負担軽減は実現されたものの、約6000個を握るのは相当な労力である。このように桜祭りは住民が総出で裏方に回り負担を引き受けることで可能となっていた。神川町では長らく、地域全体で祭りを支え、地域を盛り上げようという理想や目標が共有されてきた。だからこそ30年間も祭りが続いてきた。ただし、住民は草餅づくりにかかりきりになり、祭りも花見も楽しみにくいという状況が生まれていた。それが桜祭りに対する不満として表面化することになるが、これに関しては後で立ち戻る。

第三に、当初の飲み会に比べて、催しの規模が大幅に拡大している。その背景には、同時期に他地域で開催される同様の祭りに客を取られないためには、盛大な催しで客をつなぎとめる必要があるという考えが関係していた（井口 2015, 2014年9月13日調査より）。筆者も参加した2015年の桜祭りの催しの内容は以下の通りである。まず、桜祭りの約1

週間程前から、夜桜のライトアップが行われる。桜祭り当日は、中学校のグラウンドで大規模なステージが設営され、様々な催しが行われる。松原竜宮子供太鼓がオープニングセレモニーを飾り、挨拶や祝辞等の開会式が行われる。その後、熊野ソーランや紀州踊り隊の踊り、子供・若者によるヒップホップダンス、アフリカダンス、カラオケ大会、熊野鬼城太鼓が行われる。グラウンドでは物産展と露店も開かれている。名物の草餅、長原とちもち、那智黒石展示販売、地元商店による出店などがある。地域外からは、熊野地鶏らーめん、さんま寿司などが出店し、様々な地元の山海の幸が楽しめる（2015年4月5日参与観察より）。神上中学校旧校舎の教室では、神川の住民たちが総出で出店用の餅つきと餅作りに奔走していた。祭りのクライマックスは、「抽選会」が飾る。会場内にある「抽選券売り場」で券を買うことができ、テレビや洗濯機など高額の景品もあった。

ところで、2015年の桜祭りでは、近畿大学建築学部の教員と学生の協力により、例年にはない特別な催しが開催された。桜祭りの前日に「前夜祭」が企画され、約60年前に神川町で活躍した人気バンドを復活させる催しが開かれた。また、当日には、中学校校舎の教室で神川町にゆかりのある田本研造の生い立ちや仕事を紹介する「田本研造展」が開かれた。さらに、別の教室では、神川町で活躍する写真家の写真展が開かれた。近畿大学の人々が神川町に関わるようになったきっかけは、元神上区長の娘婿にあたる京都在住の方が、図書館建築の仕事の関係者である一級建築士の方や近畿大学建築学部の教員らに桜祭りを手伝ってもらえないかと声をかけたのが始まりであったという（2015年4月5日調査より）。これをきっかけに近畿大学の人々は、桜祭りへの協力とともに、神川町での継続的な活動拠点の確保のために空き家改修プロジェクト「コウノイエ<sup>(3)</sup>」を立ち上げる。神上地区にある1軒の空き家を活用して、自ら設計を行い、地域の職人や業者にも協力してもらいながら改修作業を進め、2018年にリノベーションが完成した。2018年12月からは、学生による手作りの月刊新聞「KOH no TAYORI」（コウノタヨリ）が発刊されており、地域との長期的な関係が継続している。2015年以降、桜祭りを中心に、地域外の人々との新たな交流や協力関係が生まれ始めていた。

しかし、人口減少や少子高齢化に拍車がかかる中で、2010年代半ばから祭りの継続の是非が実行委員会内で議論になっていた。メンバーの減少による若手の負担増大や催しのマンネリ化などを理由に、30周年となる2017年をもっての祭りの終了の是非が議題にのぼ

---

(3)「神上=コウノウエ」の「家=イエ」に由来。多田正治アトリエと近畿大学建築学部の佐野こずえ研究室の共同プロジェクトとされる。プロジェクトの詳細や作業の工程、写真に関しては、多田正治氏による記事を参照。[https://colocal.jp/topics/lifestyle/renovation/20190711\\_127451.html](https://colocal.jp/topics/lifestyle/renovation/20190711_127451.html), [https://colocal.jp/topics/lifestyle/renovation/20190813\\_128299.html](https://colocal.jp/topics/lifestyle/renovation/20190813_128299.html).

り、徐々に多数派を占めるようになる。2015年には、地域住民の意向を確認するための住民アンケートが実施された。その結果、何とか祭りを続けてほしいという声も一定数存在したものの、祭りへの意欲低下や不満の声、また若者に負担をかけたくないなどの声が多数派となり、桜祭りの終了が決定された。そして、2017年に当時の実行委員長が実行委員会の解散を宣言し、桜祭りは30年の歴史に幕を閉じることとなった。

### 2-2-3 桜覧会の開催

ところが、桜祭りの終了から1年後の2018年3月、地域から祭りがなくなることに寂しさを募らせた一部の住民<sup>(4)</sup>と、かねてから協力関係にあった近畿大学の教員とが連携して、有志団体「神川企画」を立ち上げる。そして急ピッチで準備を進め、「桜覧会」という新たな祭りを開催する。復活したこの祭りには、いくつかの重要な変更点を確認できる。

第一に、祭りのコンセプト面での変化が見られる。桜祭りにおいては、地域が一丸となって来客をもてなすという構図があった。対して桜覧会では、有志の住民と外部の人々が協力して、住民自身が花見や祭りを楽しんだり、地域外の人々と交流したりできる祭りが目指されたのである。それは、「来客主役の見せる祭り」から「住民主役のコミュニティ・イベント」への転換として位置づけられるだろう。この転換は、2018年の桜覧会の広報パンフレットの内容にも明確に表れている。「今年も神川町で桜を楽しみましょう／昨年30周年を迎えた『神川桜まつり』。／花見の原点に立ち返ることをコンセプトに／その名も『桜覧会（さくらんかい）』として今年からリニューアル！／ゆる～く、おだやか～に、なんとな～く開催しますので／春の陽気に誘われて、ゆる～くお越し下さい！」。以上から読み取れるように、住民が来客をもてなす裏方から解放され、住民自身が祭りの主役・来客となって自由に花見を楽しむことができる会としてリニューアルされた旨が強調されている。これについてはまた後で考察する。

以上と並行して、桜祭りを引き継ぐ部分もある。神川企画は、神川町にとって文化的・精神的シンボルとなっている中学校の木造校舎の保存・活用を引き継ぎ、地域外の人に知っ

---

(4) 神川町の人々が桜祭りに大きな思い入れをもっている背景には、少子高齢化の影響により他の神事や年中行事が年々縮小ないし休止に至っていることへの危機感が関係している。地域で続けられてきた盆踊りは担い手不足により2011年に一度休止となったが、2014年に場所や催しを変更して復活された(2014年11月30日調査より、また井口2015: 57-59)。ただしそれも単年の開催となった。地域の神社の秋祭りでは、1980年代には子供神輿が行われていたが、担ぎ手が減ったため最後はトラックに神輿を載せて村内をまわったというが、現在ではそれも廃止された(2014年11月30日調査より、また井口2015: 73)。町内外の人々と交流できる「町民祭」と呼べる催しは桜祭りだけであり、その「終了」への喪失感は大きかったことがうかがえる。

てもらふことを活動の主目的に据えている（2019年6月29日調査より）。

さて、第二の変更点は、祭りの運営団体が地域単位の実行委員会から「神川企画」と名付けられた有志の団体へと変化した点である。これに伴い、祭りの位置づけも「地域の祭り」から「有志の祭り」へと変化した。神川企画のメンバーは当初5名程であったが、2019年6月には10名程度に増加していた。桜祭りの実行委員会の元メンバーは2名程のみである。ほかに、神川町にIターンで移住してきた住民や近畿大学の教員が所属している。20代から50代までの男性から構成される（2019年6月29日調査より）。旧桜祭りの実行委員会のメンバー数は30名程度であったことを考えると、運営団体の規模は大幅に縮小している。

第三の変更点は、近畿大学の教員と学生という地域外の人々が主催者側に加わっている点にある。外部の人々との連携の強化は、前述の有志化に伴う人手不足を補うためには不可欠であろう。むしろ実際には、桜覧会の企画・開催は、彼らの積極的な働きかけとサポートに負うところが大きいようである。2018年と2019年の桜覧会では、最終日の本番前に約20名の学生にボランティアとして協力してもらい、会場の清掃やテントの設営、駐車場の整備、カフェの運営、草餅づくりなどを手伝ってもらった。それにより住民の負担は大きく軽減した（2019年6月29日調査より）。いまや近畿大学の人々はなくてはならない存在であることがうかがえる。

第四の変更点は、桜祭りでは集客のために大規模な催しが実施されていたのに対し、桜覧会では、準備や設営に大きな労力や資金が必要となるステージイベントや抽選会は廃止され、催しの簡素化による負担軽減が図られるとともに、カラオケ大会やカフェなど交流企画の充実化が図られている。桜覧会の催しは、大きく2つに分けられる。一週間前からグラウンドで露店が開かれ、自由に飲食をしながら夜桜鑑賞を楽しめるスペースが設けられる。ライトアップの設備は、熊野市の地域おこし補助金により高性能な射光装置が整備された。夜桜鑑賞を盛り上げようと、地元商店により露店が開かれ、焼きそばやおでん、生ビールや熱燗などが販売される。2018年も2019年も、多くの住民が夜桜を見に訪れたという。祭り当日は朝10時から夜21時まで、グラウンドと校舎内での出店や催しが楽しめる。グラウンドには草餅や茶粥、ジビエコロッケ、那智黒石、焼きそばなどの露店が並んだ。桜祭りのような大きなステージは設営されず、カラオケやバンド演奏、ダンスなどの有志イベントを事前に募り、簡易ステージで自由に行ってもらう形にした。また、校舎内では、神川町民と近畿大学の学生の協力により「貸本茶屋」という喫茶スペースが設けられるとともに、町外の人々によるカフェなども開かれた。催しの一方的な鑑賞から、飲食をしながら花見や交流を楽しめる空間への転換が図られた。

桜祭りの名物であった草餅は、負担軽減のためにかつての5分の1の約1200個に数を

減らして販売された。草餅づくりには、近畿大学の学生とともに地元の婦人会に協力を仰ぐことで、人手不足や負担への対処が試みられた（以上、2019年6月29日調査より）。

### 2-3 小括

以上の祭りの変化を抽象的にまとめると、当初地域の若者の私的なつながり、親密性、自発性を基礎とした有志の飲み会が、地域活性化の資源として位置づけ直される中で、地域主導による、住民全体で支えることが求められる、地域外からの来客に向けた祭りへと変容していった。ここには、全国的な流れでもある、「する祭り」から「見せる祭り」への変容が確認できる。だが、祭りの担い手不足やイベントのマンネリ化などを背景に桜祭りは廃止された。その後試みられた桜覧会では、大学や学生との連携が図られた。また、負担が大きい大規模な催しの廃止により負担軽減が図られた。こうした工夫は、全国的な流れとも軌を一にする。

しかし、ここで疑問が浮かぶ。桜覧会に見られた運営団体の「有志化」と「住民を主役とする祭りへの回帰」は、全国的な流れとは完全には一致しない。第一に、担い手不足が深刻化した場合、青年会などの任意団体から地域主導の祭り保存会などへと担い手を拡大することで、地域全体で支えていく仕組みが取られることが多い。また、運営単位を「広域化」する試みも見られる。対して神川町では、逆に地域主導から有志主導への転換が行われた。この方法では、担い手の確保はより困難化する可能性がある。また有志化は地域からの独立という意味を有するが、なぜそれが必要であったのかという疑問が浮かぶ。第二に、全国の中山間地域では、経済的活性化や新住民確保のために、祭りの観光化、商品化が進められている。対して神川町では、逆に住民主役の祭りへと回帰が進められた。それは一体なぜだろうか。その背景を捉えるためには、より深く地域内のローカルな文脈を検討する必要がある、中でも祭りをめぐる対立や交渉の局面に踏み込んだ分析が必要である。そもそも桜祭りの継続が困難となった要因は、純粋な人手不足というよりも、それをきっかけとした意見の相違や不満の拡大にあり、桜覧会ではその反省に基づき、地元の理解を得られるような形へと祭りを改変しようとする努力の中で、有志化や住民主役への転換が実行されていったものと解釈できるからである。次節では、桜祭りの終了のきっかけとなった不満の内容を整理するとともに、桜覧会において試みられた転換がそうした不満にいかに対応しているのかを検討する。

### 3 祭りをめぐる葛藤と交渉

#### 3-1 桜祭りはなぜ終了に至ったのか

##### 3-1-1 担い手不足と負担増大

前述のように桜祭りが終了に至った主な原因は、祭りを運営する実行委員会と祭りを支える地域住民の間で祭りへの不満が高まったことにある。

実行委員会の内部では、地域全体で進む人口減少や少子高齢化により、メンバーの減少や高齢化が深刻化していた。こうした中で、祭りの企画・運営に関わる活動、例えば寄付金・補助金集め、露店の出店団体との調整、ステージでの催しに関連する司会や踊りの団体との調整、外部への宣伝、景品の調整、祭りの会場となる中学校のグラウンドと校舎の清掃、メイン・ステージの設営、露店会場などのテントの設営、などに関して、体力的・精神的負担の拡大とそれに対する不満・反発が生じていた。

ここには世代的な不均衡も関係している。メンバーの減少・高齢化により、祭りの準備の負担が若手メンバーに集中しているという声が大きくなっていったという。20代～40代の若手は、祭り以外にも地域の掃除や草刈りなどに参加しなければならない。さらに、家庭では仕事や子育てで多忙な世代である。こうした多忙の中で祭りへの負担感が拡大し、モチベーションの低下や不満につながっていたようである（2015年11月28日及び29日調査より）。

##### 3-1-2 「見せる祭り」への疲弊感とやりがいの喪失

こうした不満は、桜祭りの運営団体である実行委員会内部だけではなく、祭りを支えてきた地域住民の間にも広がっていた。それは、2015年に実施された住民アンケートから読み取れる。以下では、アンケート用紙と集計結果を基に、祭りをめぐる地域の複雑な思いを整理する。なお、資料の使用については責任者の方の承諾を得ている。

住民アンケートは、30周年以降の桜祭りの方針について住民の意向を確認するために、2015年8月24日～9月12日に行われた。アンケート用紙の冒頭には、「桜祭り実行委員会」の反省会において、地域の高齢化や祭りのマンネリ化などの諸般の事情により「30回を節目とする桜祭りの終了」について協議がなされ、そこでいったん区切りをつけ終了したいとの意見が多数を占めたこと、しかしながら、神川町の一大イベントたる祭りの存続については住民の意見も集めるべきだと考え、アンケートを実施することになった旨が説明されている。アンケートは、「1. 第30回を期にやめてもよい」、「2. なんとか続けて欲しい」、「3. どちらでもよい」のうち1つを選び、裏面にその理由を記す形になっている。

アンケートの配布数は160件、回答数は102件で、回答率は約64%である。3つの選択肢のうち、圧倒的に多いのが「1. 第30回を期にやめてもよい」で、全体の36%を占める。それに対して、「2. なんとか続けて欲しい」は約12%、「3. どちらでもよい」は14%であった(表1)<sup>(5)</sup>。

1を選んだ人々の最も大きな理由は、少子高齢化により祭りの準備・運営が物理的・身体的に大きな負担になっている、というものだ。例えば、「若者が少なく続けることが困難と思われるため」「住民にとって大きな負担と

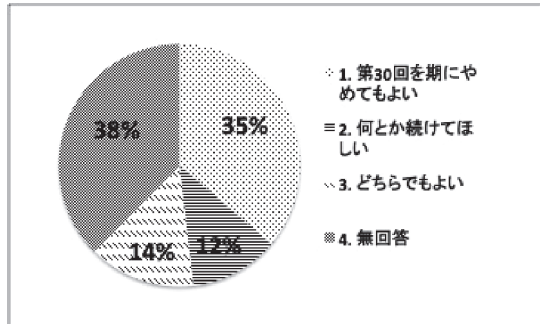
なっているため」「準備・後片付けが大変(高齢・体力の限界)」「地域に負担となっているため、市でやってもらうと良い」などの声がある。具体的に何が負担になっているのかについては、「高齢でもち握りがしんどい。もう今年で終わってほしい」「よもぎ摘みがしんどい」などの声があった。また、体力的に厳しいだけではなく、住民自身が花見や祭りを楽しめないから、という声も注目に値する。例えば、「村の人が大変で、桜をゆっくりと見て楽しめないから」「子どもや親族が来ても自分たちはもち握りなので一緒に参加できず、親抜きでは楽しめないので来なくなってしまった」などがある。

前述のように、草餅はよもぎ摘みから餅まるめまで全て町民による手作業である。住民は作業にかかりきりになるため、家族や知人と楽しみにくい状況となっていることが伺える。2019年の聞き取りでも、「花見や祭りは楽しむために行うものだけど、神川町では春が近づくとみんなどんよりしてくる。この30年間住民は一度も花見を楽しめない状況があった」という回顧の声が聞かれた。

ここで注目したいのは、1を選んだ人の中にも、完全な廃止というよりは形を変えて存続するのがよいのではないかという意見が複数存在することである。例えば、現在のような町の祭りではなく有志の祭りへと、外部向けではなく住民自身が楽しめる祭りへと変え

表1 桜祭りの存続に関するアンケートの結果

Q. 桜まつりの存続に関して	回答数	割合
1. 第30回を期にやめてもよい	58	36%
2. 何とか続けてほしい	19	12%
3. どちらでもよい	23	14%
4. 無回答	60	38%
全体	160	100%



<sup>(5)</sup> なお、同アンケートには回答者の性別、年齢、職業等の情報が含まれていないため、それらの変数との関係は分析困難である。

てはどうか、といった提案がある（「好きなもの同士が自由な形で楽しむのも良いと思う」「地元民がのんびり花見をする日にし、交流を楽しんではどうか」「桜のシーズンだけライトアップして自分たちで楽しみたい」）。したがって、1を選んだ人々の中にも、祭りの廃止を望んでいるというよりも「現在の桜祭りの形」に不満があり、その変更を求める人々が、つまり2の選択肢と重なる考えを持つ人々が少なからず存在することが伺える。

さて、2の「なんとか続けて欲しい」を選んだ住民の理由としては、やはり30年近くも続いてきた桜祭りを皆楽しみにしており終わらせたくない、少子高齢化の中でも他地域は祭りを続けており負けたくない、一度止めてしまうと復活は不可能に近い、などの声があった。住民の間には、一方で、桜祭りは住民が集まる重要な機会であるという認識がある（「やめたら人が集まる時が無くなり寂しくなるため」「普段顔を合わせる事のない人に会うことのできる機会のため」）。他方で、外部の人々が地域に来てくれる重要な機会であり、桜祭りがなくなれば外部の人に地域を見てもらう機会がなくなってしまうという懸念がある（「桜祭り以外で神川の大勢の人が来てくれないため」「桜祭りが無くなったら寂しくなるしPRすることも無くなる」「神川町の大イベントで町外の人でも楽しんでいるため、市や町外の人にも応援してもらって続けてほしい」）。こうした対内的および対外的な機能をもつ祭りが終わってしまえば、町民同士や外部の人との交流の機会がなくなり、町や人に元気がなくなり、寂しさや孤立感が増していくのではないかと不安がある（「なくなると町の空気が更に孤立化してしまうのではないか」）。

2の選択肢の理由欄には、さらなる質問項目が設けられており、「現在の運営方法で良いか？また、別の良い運営方法はあるか？」という質問項目がある。これに対しては、「現在の方法で良い」という回答はあるものの、「今は規模が大きく町民の負担も大きいので、今後は規模を小さくし住民が参加し個人個人が楽しめるよう工夫してほしい」「出来る範囲に縮小し無理のない運営を」という規模縮小の提案、住民主役の祭りへの転換の提案、「町おこしの人達の手を借りられないか」という外部との連携の提案、「祭りではなく期間を決めて物産等を販売するなど、桜を観る会にしてはどうか」という開催形態変更の提案が多くを占めた。

さらに、「続けていくうえで、現実行委員会に足りないところは？」という質問項目も設けられている。これに対しては、「企画力」「少しでも手当を出して協力者を募るのも必要ではないか」「先進地事例の見学、NPO法人化を図るのも良いのではないか」「皆が参加できる雰囲気をつくってほしい」などの意見が出されている。このように、「桜祭り」を存続させたいと考える人々の間でも、現在の開催方法や運営方法に関して変更すべき点や改善すべき点を指摘する声が多数あることがわかる。



最後に、「3. どちらでもよい」の理由はどのようなものか。まず、「手伝いもできず若い人たちに苦勞をかけるので、皆さんの意見に任せます」「実行委員が少なくなり、今年のような雨は特に大変だったと聞いている。若い実行委員の意見を聞いてほしい」と運営側や特に若手メンバーを気遣う声、「やめるとなるとホッとする一方、寂しい気もする」という複雑な心境など、様々な声が存在する。さらに、1や2と同じく、「人が少なくなってきたので、それに合ったイベントにしてはどうか」「町民に負担がないよう販売する人は自己責任で」「町民が楽しめるように変えていってはどうか」というように、住民自身が楽しめる祭りを求める声が存在することがわかる。

集計結果だけを見ると、1の祭りの終了を選んだ者が多く見える。ただし、その理由に目を向けると、祭りの存続そのものへの異論というよりも、身体的・精神的に負担の大きい現在の開催形態・運営形態への不満が存在することが見えてくる。現在の桜祭りはもうやめたいが、お祭りのなものが地域から完全になくなるのは寂しい、残って欲しいという思いがかいま見える。そしてそれは、2や3を選んだ住民とも重なる方向性を含んでいるといえる。

### 3-1-3 小括

以上をまとめると、桜祭りが終了に至った原因は、第一に、担い手の縮小・高齢化による身体的・精神的な負担増大、それに伴う精神的な疲弊感や不満の拡大にあることがわかる。しかし第二に、桜祭りで追求された来客を主役とする「見せる祭り」への疲弊感とやりがいの喪失も関係することが明らかとなった。中でも、桜祭りの目玉である草餅作りが住民にとって大きな負担となっており、当日も餅づくりに専念しなければならないため、家族や友人と祭りや花見をゆっくり楽しむことができないという不満が明らかとなった。前述のように桜祭りは、神事や伝統行事とは無関係に、一部の住民が花見を楽しむ私的な飲み会を前身とする。だが、外部から地域に人を呼び込むために「商品化」されるとともに、地域の祭りとして「公共化」される中で、いつしか祭りの主役は住民から外部の来客へと変わり、住民自身が祭りを楽しむことが難しい状況が生まれていた。それが祭りへの意欲低下や不満の増大につながっていったと考えられる。ここには、全国的な流れでもある祭りの商品化に伴う問題が如実に現れている。

第三に、以上を背景として、祭りの是非をめぐる地域内で意見の相違が表面化し、従来存在していた合意が揺らぎ、統一見解の形成・調整が困難化したことにより、祭りの継続を望む声が一定数存在した中においても、地域単位での祭りの運営が困難となったことが見えてくる。仮に地域内に祭りの継続に対する統一見解が存在し、克服すべき課題が人手

不足や負担軽減だけにあるのであれば、祭りの規模縮小や簡素化、または外部の人々との連携だけでもある程度は対処可能であろう。しかし、桜祭りの場合、そうした可能性はなお残されていたものの、祭りの終了に至った。その一因は、「地域の祭り」として開催する以上、地域内での意思統一が不可欠となるものの、消極的・否定的意見が拡大する中で、説得や合意形成が困難となり、「地域一丸」となって祭りを支えていくのが困難となったことにあると考えられるのである。

以上のように、桜祭りが終了に至った経緯には、人手不足などの量的問題だけでなく、地域内の意見の相違や葛藤の問題が密接に関係しているのである。

### 3-2 葛藤を乗り越える桜覧会

以上のような祭りへの不満を視野に入れると、桜覧会が進めた様々な取り組みは、単なる人員確保のための技術的対応であるだけでなく、地域内に存在する祭りへの不満をいかに反映し、反発を回避したり「かわせる」形へと祭りの姿を変えていけるのかをめぐる試行錯誤でもあったことが見えてくる。逆に言えば、葛藤が存在する状況下においては、そうした変化がなければ、再び地域内の反発が高まり、中止に至る可能性が高い状況がある。

こうした観点から見ると、第一に、桜覧会が実施した運営の有志化は、地域単位での祭りへの不満が高まっていた状況においては重要な意味をもつたであろう。地域の祭りとして開催するならば、地域の総意や理解が必要となる。それを得るためには不満を抱える住民の説得や交渉に大きな労力を払わなければならない。説得がいつもうまくいくとは限らない。それが困難なほど意見の対立が表面化して、桜祭りは終了に至った。こうした状況下で祭りの存続を模索する場合、一旦地域から切り離れた形での有志による自発的な祭りという位置づけへの変化を強調しなければ、祭りの再開は困難であったかもしれない。地域の負担への警戒感が根強い状況では、地域から独立した祭りであることを強調することが必要であったといえる。そうした趣旨であれば、祭りの再開に対する批判を予め回避したり、ある程度かわすことが可能になる。

実際、こうした配慮は神川企画のメンバーにおいても暗黙の前提となっている。なぜ有志団体にしたのかに関して、神川企画のメンバーは次のように話していた。桜祭りは「地域のお祭り」だったので、半ば義務感や使命感にかられて動かざるをえない人も中にはいたかもしれない。今まではやりたくなくてもやらなあかんとやっていた人もいる。そうして負担感が大きくなり、旧桜祭りは廃止された。その「二の舞」にならないように、今度は完全に有志でやることにした。それが「神川企画」である、と（2019年6月29日調査より）。

とはいえ、負担増大により祭りを終了したのになぜまた再開するのか、という批判は存在するという。祭りをめぐる住民の警戒感は大い。少子高齢化などの厳しい状況を踏まえると、それは仕方のないことなのかもしれない。こうした中で、地元の理解を得る、少なくとも開催が困難なほどの反発を回避するには、最低限有志化が必要であったと推察される。あえて「祭り」という名称を避け、桜覧「会」と名付けたことにも、自発的な会であることを強調し、祭りをめぐる拒否感に応答しようとの意図があったのではないだろうか。地域とは明確に独立した、任意性、自発性を出発点とした祭りの強調は、地域内の葛藤から一定の距離をとる上で重要な意味をもったと考えられる。

第二に、近畿大学の人々との連携強化もまた、単なる人員確保という意味合いだけでなく、祭りのコンセプトの変更を強調し、新たな意味をもたせる上で一役買っていると推察される。神川町にとって近畿大学の人々は新しい風であり、彼らの活動に対する期待や信頼は厚い。こうした人々に祭りの主催団体に入ってもらうことで、一度低下した祭りに対する前向きなイメージや期待を回復し増幅させる意味もあったのではないだろうか。地域内だけでは祭りへの期待の調達が困難化する中で、地域から期待が寄せられている外部の人々を祭りに巻き込むことで、祭り自体に対する理解や期待を確保しようとする意味合いも、暗黙に存在するのではないか。

ところで地域外の人々が祭りや地域活性化に参加する場合、短期的な関係となったり、住民からの不信や反発に遭遇したりするなどの困難も予想される。しかし、神川町ではそうした問題は生じていないようである。それはなぜなのか。近畿大学の人々が受け入れられた背景には、いくつかの条件が関係する。第一に、まずもって地元自身が外部の協力者を積極的に探しており、彼らを受け入れる素地がある程度整っていたことが挙げられる。第二に、すでに見たように神川町と近畿大学との間には、元神上区長の親類の仕事仲間という「私的な縁」が存在し、遠い縁ではあるものの、地域に何らかの「ゆかり」があるということが持続的関係の基礎となっている可能性がある。しかし、それらの条件が整っても必ずしもうまくいくわけではないだろう。第三の条件として、聞き取りでは、近畿大学の人々の地域への「入り方がうまかった」という声が聞かれた。桜覧会の参加者によれば、近畿大学の人々は地域にとって「新しい風」になっており、今では「地域に完全に同化している」。それがなぜ可能となったのか尋ねたところ、「『コウノイエ』を拠点にして地域のことを手伝いますという入り方が良かった。メインはコウノイエ。空き家の改修がメイン。サブとして、手伝いをしますというスタンスだから、地元も過大な期待はしないし、地域に溶け込んでいる。外の人が勝手にやっているという感じではない」と話してくれた(2019年6月29日調査より)。ここには興味深い論点が含まれている。地域活性化を主目

的に掲げながら地域に入るよりも、別の目的で地域に入り、派生的・副次的活動として地域活性化に関わる方が、地元にとっても受け入れやすく、外部者にとっても活動しやすい場合が存在するかもしれないからである。いわば「緩やかな」、「責任の軽い」関わり方が功を奏する場合があります。一方で、地域からすれば、地域活性化を主目的に掲げる外部者に地域の事業を正式に「依頼」「委託」することにはそれなりのリスクが伴うだろう。そうして慎重になったり、後で後悔したりする場合もある。対して近畿大学の場合は、「本業」はあくまで空き家改修であり、「副業」として地域の活動に関わってくれるという前置きがある。こうした前置きがあることによって、学生の活動への過度な期待や幻滅、警戒心が生じにくく、逆に地域のことを手伝ってくれる際には通常以上の喜びや感謝が生まれうる状況があると考えられる。外部者にとっても、「地域を手伝う」という利他的な目的だけではモチベーションの維持が難しい場合もあるだろう。対して近畿大学の場合は、過疎地域における空き家リノベーションやアトリエの設計・施工等の活動自体が建築学・住宅計画の重要な課外学習になりうる。以上のように、神川町と近畿大学の間には、1つの目的に一本化せずに、それぞれの異なる目的を同時に許容しうる、一定の距離感を保った、緩やかな形での、互惠的な関わり方が成立している。それが持続的関係の土台となっているのではないだろうか。以上とも関係するが、第四に、空き家改修という長期的・継続的な活動があることや「コウノイエ」という誰にとっても一目瞭然な「物理的」な拠点ないし成果が存在することがプラスに働いている可能性がある。祭りという一時的かつそれ自体は継続的に目にするできないイベントが主となれば、地域を訪れる回数や接触する住民の範囲、目に見える活動の幅は限られてしまう。そうして「一体何をやっているのかわからない」といった不信につながる可能性がある。しかし、近畿大学の場合には祭りというイベントを越えて、空き家改修のために定期的に地域を訪れ、祭り関係者以外の地元の建設業者や職人たちとの交流も生まれている。地域内で意見が分かれる祭りとは別の事業の推進という別の目的・文脈の存在が、祭りとは別の回路での地域への参入を可能とし、祭りに対する立場の違いを超えた受け入れにつながったのではないか。以上のように、外部者が地域活性化に「副次的・間接的」に関わる効果や「物理的・継続的な拠点」の効果は、神川町だけでなく他地域でも生じていると推察される。今後事例を積み重ねていくことで、地域活動へのアウトサイダーの関わり方に関して新たなモデルを構築できるかもしれない。

さて、以上とも関係するが、第三に、桜覧会において強調された住民を主役とする構図への転換もまた、桜祭りへの不満に対応したものにほかならないだろう。桜祭りに後に祭りを再開するためには、桜祭りに対する不満の中心に存在した、住民が来客をもてなすとい

う構図からの脱却が不可欠であった。そしてこの文脈においても、外部との連携が重要な意味を持っていた。近畿大学の人々が主催に加わることは、桜祭りとは反対に、外部の人々が裏方にまわり、住民が主役となって花見を楽しめる祭りであるという構図をアピールする上で一役買っていると考えられるからだ。「住民のための祭り」への転換を強調する上で、主催側への「外部の人々」の加入（裏を返せば住民主権からの解放）がシンボリックに活用されていると考えられるのだ。

ところで、前述のように、祭りの有志化も外部との連携も（いわば「運営の広域化」ないし「脱地縁化」も）、祭りを地域から切り離していく方向性を内包している。祭りをめぐる対立から一定の距離を取り、祭りの再開を容易にする上で、それらは意味をもったといえる。しかし、そうした方向性だけでは、逆に祭りが地域から乖離しすぎてしまう可能性も懸念される。外部の人々や有志の人々が祭りを主導することで、他の住民が祭りに参加しにくくなったり、例えば地域で勝手なことをしないでくれというような反発や不信感が増加したりする可能性も考えられるからだ。

しかし、桜覧会においては、そうした状況を回避するための取り組みも重視されていた。地域の住民に祭りに参加してもらえるよう、祭りが地域から疎遠にならないような様々な試みが確認できる。例えば、前述のような住民主権の祭りというコンセプトへの転換や、地域のシンボルである中学校校舎の活用という目的の継承も同様に位置づけられるだろう。

以上に加えて、例えば事前に回覧板を回すことにより、桜覧会への住民の理解を促す努力が行われた。神川企画の代表は、「勝手にやっていると思われぬように、事前にこまめに回覧板を回したりした。地域の人に来てもらうために」と話していた（2019年6月29日調査より）。予め回覧板をまわし周知を徹底することで、不信感や警戒感の拡大を回避し、祭りに対する住民の理解を促し、当日も足を運んでもらえるような努力が進められたのである。

さらに、神川企画の代表の方の属性や性格にも、桜覧会を可能にする要素があるのではないか。神川企画の代表の方は、元々神戸で生まれ、18歳で仕事の関係で熊野地域に移住し、10年程前に結婚をきっかけに神川に移り住んできた。現在では、神川町で商店を営んでいる。桜覧会や町おこしに関して負担ではないか尋ねたところ、「負担には思わない、地元だし」と話していた。また、神川企画のメンバーに移住者が所属しているという話の中で、どのように移住者の方と知り合ったのか尋ねたところ、商店ではプロパンガスの事業もやっていて、ガスの配管工事や検針で話す機会があり、神川町の全員と顔見知りだからね、と話していた（2019年6月29日調査より）。以上からは、代表の方のフレンドリー

さや地元を盛り上げたいという地元愛に加え、自身が地域外の出身であることから移住者とも話やすいという点、さらに商店とガス事業者という職業上の理由から地域の住民と日常的なコミュニケーションを保っていることから、地域内外における多様な人々との関係をつなぎとめるハブ的な役割を果たしている可能性が見えてくるのである。

さらに、桜覧会が地域とのつながりを維持できているのは、神川町の婦人会に協力を仰ぎ、草餅づくりなどで協力を得られていることが大きいと考えられる。婦人会は、任意団体であるが、地縁団体でもあり、地域と密接に関係している。こうして婦人会を通じて住民に祭りに参加してもらうような工夫が取られている。

抽象的に見ると、桜覧会の事例は、過疎地域における祭りの存続形態の新たな可能性を示している。繰り返し見てきたように、過疎高齢化の進む中山間地域では従来自明であった合意やサポートが揺らいでおり、神川町でも同様の困難から桜祭りが廃止に至った。しかし、桜覧会はそうした中でも祭りを復活させた。それはいかにして可能となったのか。本稿で明らかとなったのは、地域からの全面的な合意やサポートが得られない中でも、地域に存在する様々な部分的な合意や別の文脈で蓄積された人的ネットワークや資源の創造的な活用ないし転用を通じて、新たな祭りを立ち上げコミュニティに定着させていく可能性に他ならないのである。例えば住民アンケートの結果明らかとなった「有志化」や「コミュニティ・イベント」への転換に対する比較的前向きな声を踏まえた祭りの改革、地域内外の職業的及び私的な人的ネットワークの活用など、様々な資源が活用されている。こうした準拠枠は、「無」から作られたわけでも、すべてが意識的、戦略的に活用されているわけでもないだろう。むしろ、地域に存在する様々な回路が、些細な配慮や工夫の中で結び付けられ、新たな準拠枠としてまとめあげられているのである。換言すれば、「村の祭り」という「上から」の枠組みが存在せずとも、例えば「知人の知人の知人の……」といった局所的なマイクロなつながりを辿り、積み上げることで、祭りという巨大な事業を「下から」成し遂げることが示唆されるのである。

別の角度から見ると、桜覧会の事例は、コンフリクト状況下における祭りの存続形態に関しても興味深い示唆を提起している。本稿で見てきたように、桜覧会では、祭りをめぐる不満や対立を踏まえた形での祭りの改変や強調点の移動などの工夫が多面で確認できる。それにより、地域からの切り離しとつながりの維持の間で絶妙なバランスが取られている。「見せる祭り」と「する祭り」、地域からの「脱埋め込み」と地域への「再埋め込み」という相異なる、時には相反するベクトルを前に、どちらかに一本化したり、両者を対立させたりするのではなく、両者の間を「振動」ないし「往復」することによって、変化する状況に応答し、反発や対立の表面化を回避し、異なる価値観や利害を有する人々を互い

に結びつけ、包摂しうのような回路を内在化しているのである。こうしたいわば「合意されきらない合意」ないし「異質性を内在化した協同<sup>(6)</sup>」が瓦解せずに成立し得ているのは、再び前述のような地域に存在する部分的合意やマイクロな資源の積み重ねによるところが大きいであろう。桜覧会の事例は、こうした諸条件が整えば、地域からの全面的な支援が調達困難であっても、祭りの継続が可能であることを示している。逆に言えば、桜覧会の実践は、従来の合意に代わる新たな条件を探る試みとして捉えられるのである。

もちろん、桜覧会の今後の動向には注視が必要である。聞き取りでは、資金面の困難を危惧する声も聞かれた。市の補助金の受け皿は区単位であり、有志の事業には支給できないという制度的限界から、公的サポートを受けにくくなったからである。桜祭り時にはあった熊野市長の挨拶も桜覧会では行われていない（2019年6月29日調査より）。また、2019年の桜覧会の来客数が2018年と比べて3分の1程度に減少したことへの不安の声も聞かれた。その原因に関して神川企画のメンバーは、2017年をもって神川町の祭りは終わったという認識が残っているからではないか、諸事情から2019年は土曜日開催となったことなどが関係しているのではないかと話していた（2019年6月29日調査より）。原因は定かではないが、祭りの開催が地域の負担とならないような取り組みは引き続き重要であろう。

しかし、新たな変化も確認できる。桜祭りの終了の一因となった草餅づくりが、今では住民と学生の重要な交流の場として機能し始めているというのだ。桜覧会を支援している方は次のように話していた。「昔は眉間にシワを寄せながら草餅を作っていた。でも今はイヤイヤじゃない。みんな楽しみながらやっている。草餅の作り方を学生に教えながら、地域の人々も、和気あいあいと作るのを楽しがっている。ようやく住民が楽しめる祭りが実現されたのではないかと。また、桜覧会の夜の打ち上げでは、運営側、神川町民、地域外の人々が一緒になって最高潮の盛り上がりを見せるという。熊野市の地方新聞でも、桜覧会をやってくれてありがたいという参加者の声が紹介された（2019年6月29日調査より）。これらを踏まえると、桜覧会は有志の催しを超えて、地域にとっても重要な意味を持ち始めているように感じられる。今後の展開が期待される。

---

<sup>(6)</sup> 以上のような「協同」のあり方は、理論的には、A. ハーンやN. ルーマンが提唱する「了解」実践の一例として位置づけられるかもしれない。了解論の詳細は井口(2017, 2019の特に第三部)を参照。J. ハーバーマスの理性的合意論に代表されるように、社会学では従来、最も理想的な協同は人々の全面的な合意に基礎付けられるとされてきた。対してハーンやルーマンは、合意形成が困難な場合に、それでも合意が追求されればかえって対立の先鋭化や関係の断絶が招かれうることに警鐘を鳴らす。そのような場合、むしろ実際の相違性にもかかわらず、あたかもお互いが同一見解に至ったかのように想定するという、「合意フィクション」(了解)の構築実践が重要となるという「了解論」を展開した。桜覧会の実践には、これに似た局面が幾重にも確認できるだろう。

## 4 結論

本稿では、神川町における桜祭りの終了とその後の桜覧会の試みに注目しながら、祭りの形態変化が地域社会内の祭りをめぐる交渉と密接に連動していることを明らかにした。本稿で見てきたように、神川町では、全国の他地域と同様祭りの担い手の確保が困難となるだけでなく、それをきっかけとして祭りに対する不満や意見の相違が高まるとともに、観光客本位の祭りに対する住民の意欲低下が生じ、長く続いた地域の祭りが終了することとなった。しかし、祭りの継続を願う一部の住民が外部の人々と協力することで、有志の祭りとしての復活が模索され、一定の成功が収められた。それが可能となったのは、運営形態を有志化するとともに外部化・脱地縁化することにより、地域を取り巻く困難から祭りの運営を切り離す形で組織再編が可能となった点に負うところが大きいだろう。しかしそれだけでは逆に祭りが地域から切り離される可能性がある。こうした事態を回避するために、桜覧会では同時に、「観光客本位の見せる祭り」から「住民が楽しむコミュニティ・イベント」へのコンセプトの転換や地域の婦人会との連携などを通じて、外部からの来客だけでなく地域住民をも主役とする、地域に根ざした祭りが模索された点が注目し得る。地域からの祭りの脱埋め込みと地域への再埋め込みの間でうまくバランスが取られる形で祭りの再編が進められたことにより、一度廃止された祭りを新たに復活させ継続することができていると考えられる。もちろん、桜覧会の試みは現在進行形であり、今後も注視が必要である。また、調査の限界から本稿が依拠するデータには一定の偏りがあり、より多様な意見を有する人々に聞き取りをすることで、また違った側面が見えてくるかもしれない。とはいえ、本稿を通じて明らかとなった神川町での試行錯誤には、同様の困難に直面する全国の中山間地域にとっても大いに注目し得る工夫と智慧が秘められていることは間違いないであろう。

## 参考文献

- 有本尚央, 2012, 「岸和田だんじり祭の組織論——祭礼組織の構造と担い手のキャリアパス」『ソシオロジ』57 (1): 21-39.
- 芦田徹郎, 2001, 『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社.
- 石川寛輔, 2004, 「那智黒石と神上」石川寛輔・森田次郎・山口修平「第6章 地域を支えているもの」『地域に学ぶ 三重県尾鷲・熊野地域から 第8集』2003年度社会学調査実習報告書, 愛知県立大学・関西学院大学・京都大学・四天王寺国際仏教大学: 142-152.
- 井口暁, 2015a, 「2. 神川町の歴史と現在」井口暁・奥田絵・宋承炫・永野北斗・榊井翔太「第3章神川班 過疎高齢化対策の『宝箱』」『地域に学ぶ 三重県熊野地域から 第16集』2014年度社会学調査実習報告書, 京都大学: 58-74.
- 井口暁, 2015b, 「8. 神川の未来に向けて」井口暁・奥田絵・宋承炫・永野北斗・榊井翔太「第3章神川班



- 過疎高齢化対策の『宝箱』『地域に学ぶ 三重県熊野地域から 第16集』2014年度社会調査実習報告書, 京都大学: 120-143.
- 井口暁, 2016, 「補章 分岐点にたつ桜祭り——住民の楽しめる祭りに向けて」井口暁・石丸亮・晏暁丹・鈴木慎介・西木久実「第4章 神川班 神川町の過去・現在・未来——地域活性化の「宝箱」のその後とは」『地域に学ぶ 三重県熊野地域から 第17集』2015年度社会調査実習報告書, 京都大学: 182-207.
- 井口暁, 2017, 「異質性を基礎とした協同形式としての了解——アロイス・ハーンの「戦略としての了解」論を手がかりに」『ソシオロジ』62 (1): 3-21.
- 井口暁, 2019, 『ポスト3・11のリスク社会学——原発事故と放射線リスクはどのように語られたのか』ナカニシヤ出版.
- 貝沼良風, 2017, 「埼玉県秩父市荒川白久地区における天狗祭りの再生と中断」『日本地理学会発表要旨集』2017a (0): 100143.
- 永野北斗, 2015, 「3. 神川地区の桜祭り」井口暁・奥田絵・宋承炫・永野北斗・榊井翔太「第3章 神川班 過疎高齢化対策の『宝箱』『地域に学ぶ 三重県熊野地域から 第16集』2014年度社会調査実習報告書, 京都大学: 75-82.
- 藤本穰彦・田中恭子・平石純一, 2010, 「中山間地域の担い手不在問題——ボランティア・大学生の可能性」『総合政策論叢』(19): 67-81.
- 小松和彦, 1997, 「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編著『祭りとイベント』小学館.
- 森田次郎, 2004, 「『那智黒石の里神川ふれあい桜まつり』について」石川寛輔・森田次郎・山口修平, 2004「第6章 地域を支えているもの」『地域に学ぶ 三重県尾鷲・熊野地域から 第8集』2003年度社会学調査実習報告書, 愛知県立大学・関西学院大学・京都大学・四天王寺国際仏教大学: 130-135.
- 小田切徳美, 2009, 『農山村再生——「限界集落」問題を越えて』岩波書店.
- 田光子・谷川幸雄, 2006, 「学校・地域連携研究：沼田町『夜高あんどん祭り』の取り組み」『浅井学園大学短期大学部研究紀要』44: 39-54.
- 谷部真吾, 2008, 「祭りにおける社会統合機能に関する覚書——遠州・森の祭りの戦中期を事例として」『HERSETEC』2 (2): 15-37.
- 谷部真吾, 2012, 「祭りの変化と社会状況——見付天神裸祭における1960~61年の変化を事例として」『名古屋大学文学部研究論集 哲学』(58): 53-72.
- 卯田卓矢・阿部依子, 2015, 「過疎地域における祭礼の存続形態——佐久市望月地域の榊祭りを事例として」『地域研究年報』37: 33-59.
- 柳田國男, 1969, 『柳田國男集第十巻 「日本の祭り」』筑摩書房.

## 謝辞

現地調査に際して、畑中俊哉氏（「桜まつり実行委員会」元代表・「神川企画」メンバー）、田中慎吾氏（「神川企画」代表）、山口政高氏（神上区長・神川町区長会会長）、松山秀夫氏（元神上区長・神川町区長会会長）、今中義和氏（「桜まつり実行委員会」元メンバー）を始めとする神川町の方々、久保智氏（飛鳥町在住・熊野市議会議員）を始めとする熊野市の方々に貴重なお話をお伺いすることができました。また、突然のお願いにもかかわらず畑中俊哉氏には桜祭りに関する住民アンケートを、松山秀夫氏には神川町に関する資料を快く閲覧させていただきました。ご協力いただいたすべての方々へ厚く御礼申し上げます。

調査にあたり、京都大学文学部社会学研究室の松田素二先生をはじめ、社会調査実習「地域に学ぶ 三重県熊野地域から」に関係する方々に多大なるご協力を賜りました。また、

本稿の執筆にあたり、松田素二先生、丸山里美先生、朝田佳尚氏、有本尚央氏から貴重なご意見を賜りました。心より感謝申し上げます。

なお本稿は、日本学術振興会特別研究員助成（18J01169）および科学研究費若手研究助成（19K13046）による研究成果の一部です。

（いぐち さとし・日本学術振興会特別研究員 PD）

## **Transformation of the Festival and Community Conflict**

Satoshi IGUCHI

Local festivals in rural areas of Japan are undergoing major changes because of the shrinking population and the increasing age of local residents. Many festivals are disappearing or being suspended due to lack of manpower or funds, lack of motivation, or because of disagreements or conflicts within the local community. On the other hand, some successful countermeasures have been reported in previous studies, such as changing the form of a festival from religious or self-enjoyment purposes to tourism promotion, economic revitalization or the recruitment of new residents, such as university students, from outside the region. Previous studies have enumerated a wide variety of such initiatives, but have rarely addressed how such countermeasures should be discussed, evaluated, accepted and introduced within the local community. Even if a given solution is known to be effective, it will not be introduced unless most of the local residents accept it. It is important to understand the transformation process associated with a festival while positioning it within the context of negotiation or dialogue involving the local community.

This paper explores how a festival can transform itself in order to respond or adjust to conflict within the community - focusing on the changes made to the local "Cherry Blossom Festival" in Kamikawa, in Mie Prefecture. This festival had been held regularly since the 1980s, but in 2017 it was called off due to a lack of manpower and differences of opinion among local residents regarding its continuation. However, in 2018, some residents and outside supporters attempted to revive the festival, renaming it the "Cherry Blossom Party". They appealed for "a return to making the festival an enjoyable occasion" and thereby tried to respond to some of the criticisms that had earlier been directed towards the former festival. This strategy is noteworthy in that it is the reverse of the general trend from self-enjoyment to tourism mentioned above. This paper concludes that in order to fully understand the factors contributing to the transformation of a festival, it is essential to explore the local context and closely examine what areas of agreement or disagreement are associated with it.